

機関番号：32615

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21820039

研究課題名（和文）コンビニ閉店にみる日本の小売業の意識の変化を文化人類学で分析する

研究課題名（英文）The Changing Consciousness of Japanese Small Retail Examined through an Anthropological Analysis of Konbini Franchise Closings

研究代表者

ホワイトロウ ギャヴィン (WHITELAW GAVIN)

国際基督教大学・教養学部・准教授

研究者番号：50527140

研究成果の概要（和文）：コンビニは「ライフライン」としてなくてはならない役割を担うまでになった。しかし、コンビニの社会的な役割が高まる一方で、他のインフラと異なり、個人経営のコンビニへの期待は、経営者の家族や従業員の肩に重くのしかかる。社会的な期待、コンビニチェーン間の競争、厳しい利益の追求が絡み合い、フランチャイズ店経営者の家族へのプレッシャーは、高まるばかりだ。本課題では、主に A タイプ（既に商店を家族経営していたコンビニ）の経営者に焦点を当てた。個人経営者がフランチャイズビジネスに魅せられた様々な理由が、今やフランチャイズビジネスから手を引く理由になっている。高齢になった経営者はコンビニ業界を離れ、個人商店や家業に戻る。コンビニ経営を通し、体力的にきつかったにもかかわらず、フランチャイズビジネスを通して「家族」の理解が深まった。日本のフランチャイズ業界の限界が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：Convenience stores have become a critical form of social infrastructure and a “lifeline” during times of disaster and crisis. Yet unlike other forms of social infrastructure konbini are private enterprises and their day-to-day operations rests largely on the shoulders of an owner family and their staff. The societal expectations of these stores, the harsh competition between chains and the rigid profit expectations combine to place increasing pressure on the “franchisee family.” In focusing mainly on A-type owners (former independent merchant families), my research revealed that many of the reasons that attracted small shop owners into the franchise business are now the very reasons that these owners are choosing to leave the industry and, in some cases, return to a former retail business or family-related occupation. Interview data suggests that the time spent as konbini owners was not negatively viewed. Despite its challenges, the konbini experience fortified owners’ personal conceptualization of “family” and family’ s importance for the functioning of the franchise industry.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,010,000	303,000	1,313,000
2010年度	970,000	291,000	1,261,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,980,000	594,000	2,574,000

研究分野：社会文化人類学

科研費の分科・細目：人文学・文化人類学・民俗学

キーワード：コンビニエンスストア、小売、文化人類学

## 1. 研究開始当初の背景

日本の産業が社会変化に適応し、生き残ってきた行程はまさに、戦後、小規模家内企業がたどって来た行程であると関連の研究では指摘されているが (Friedman 1988; Haak 1975; Patrick and Rohlen 1987; Wagatsuma 1984)、ここ数十年間に、これらビジネスの形状は大幅に変化した。特に、コンビニエンスストア (以下コンビニ) のフランチャイズが業界の中心を占める小売業界での変化は顕著である。コンビニのフランチャイズは、新しい形の「近所の店」を生み出した。コンビニ業界の売上高は、2008年度には、デパート業界の売上を超え、7兆8千億円の売上高を記録した。これは史上初のことである。(Asahi 2009/1/19)しかし、このような数字の裏には、複雑な問題が隠されている。現在、15のチェーン大手が、合計4万4000余りの店舗を全国で運営しているが、コンビニ業界は、飽和状態に達しつつある。その結果生じる熾烈な競争のため、数が増え続けている家内フランチャイズ経営の当事者たちは、閉店しなければならないかもしれないという問題に、現実として直面している。コンビニは、本来日本の小売業界が持っていたダイナミックさを受け継いでいる。しかし、今日、コンビニを閉店する人々は、個人的に何を経験し、また、社会はどのような理解を示しているのだろうか。現代日本における企業家精神、暮らし、アイデンティティーをより良く理解するために、先に述べた個人的経験や、社会の理解といったことは、どのようなヒントを与えてくれるのだろうか。

次に述べる研究企画の中では、先述の問題を取り上げてゆく。コンビニフランチャイズを現在経営している家族と、元経営者の体験談を集め、分析を行う。このデータを元に、ある社会グループに分類されるこの人たちが、どのような経験をし、また、閉店の決断に至ったかを調査する。また業界関係者、労働者、客にインタビューし、フランチャイズビジネスに関わる生活サイクルに関して、コンビニオーナーが個人的に抱いている概念と、社会の中の他の人々が、オーナーやコンビニに対して示す姿勢と、文化的価値観がどのように違うかをみる。「新経済」(Albrecht and Zemke 2002; Genda and Hoff 2005; Herzfeld 2004; Löfgren and Willim 2005; Nakajima 2004; Newman 1999)に於ける人々の生活を研究している世界の学者は年々大きな研究成果を挙げているが、私の研究もその成果に貢献するものと思う。また、リスク、生き残り、失敗に関する文化的理解に関して、諸学会で活発な議論、討論が行われているが、私の研究もこの議論に加わることができると思う。

(Beck 1992; Miyazaki 2004; Sandage 2005).

## 2. 研究の目的

コンビニ年間総売り上げは7.8兆円(2008年現在)を計上し、百貨店の年間総売り上げを超えるという歴史的な記録を達成した。主要15コンビニチェーンの下に44,000店舗のコンビニがひしめき、コンビニの店舗数は飽和状態に達している。厳しいコンビニ競争の中で、家族経営のコンビニの数々が閉店に追い込まれるという問題点に直面している。コンビニは伝統的な家族経営スタイルを維持していながら、コンビニビジネスの閉店を決断した多くの例がある。コンビニの閉店を通して、オーナー個人、あるいは家族はどのような経緯をたどるのであるだろうか。それを社会的にどのように理解をしてゆけば良いのだろうか。一人の起業家として、コンビニビジネスの経営者として、現代の日本における個のアイデンティティーをどのように理解していったら良いだろうか。さらに掘り下げてゆきたい。

## 3. 研究の方法

2009年度は、諸情報を収集したり、関東、東北、中国地方の合計12の現および元コンビニ店舗オーナーから収集した情報の分析を行うことを主な研究とした。情報提供者へのインタビュー、また特定の店舗取材するために、名古屋、岐阜方面へ4回、山形県へ1回行った。リサーチアシスタントの協力のもと、約20時間に及ぶ録音されたインタビューのテープおこしと分析を行った。日本の主要新聞と、業界誌から、小売業界、コンビニに関する記事を収集し、各記事の要点をまとめた。また、3月テキサス州に行ったが、その際にアメリカで初めてコンビニエンスストアが開店した場所もいくつか訪れた。また、アメリカにおいて、コンビニエンスストアがどのような変化をとげてきたか、また、店舗のオーナーシップに関してどのような変化があったかということ調査するために、歴史家、歴史資料収集の専門家、コンビニ業界関係者を取材した。この調査は、私が日本で行っている研究内容と文化的比較をすることを目的としている。

2010年度は、関東地区にある元コンビニ店舗オーナーを対象にフォローアップインタビューをいくつか行った。リサーチアシスタントの協力のもと、テープおこしと分析を行った。また、1999年から2011年の業界誌の中から、コンビニ店舗のオーナーシップに関する記事を収集し、インデックス化し、要点をまとめた。また、これらの記事や、過去2年の間に私が撮影した写真をデータベース化

した。研究では、いくつかの重要なパターンが明らかになってきた。コンビニ店舗オーナーの高齢化は、彼らがコンビニ経営を続けてゆく上での将来の展望に多大な影響を与えている。コンビニ経営を自分の子供等に将来引き継がせることができるという動機で始めたにもかかわらず、逆に、後を継がせることが大変であるという理由で、閉店を決心するケースが見られる。また、コンビニの「便利さ」の定義の内容が、時代の流れとともに変化し、このことが、オーナーの決断に影響を与えている。

#### 4. 研究成果

(1) 今年度の研究により、コンビニ元経営者が直面した主な問題が明らかになった。その中には、体力的な疲労、精神的ストレス、従業員維持のための苦勞、コンビニチェーン間で高まる競争、店の経営の複雑化、本社やスーパーバイザーとのコミュニケーショントラブルなどが含まれていた。

(2) 当初、コンビニ経営者はコンビニ経営を子供に引継ぐことを想定していた。本部との最初の契約が切れる頃、特に2000年始め頃になると、コンビニ経営を子供に引継ぐ事が現実的な選択肢ではない、ということにコンビニ元経営者らは気づいた。

(3) コンビニ元経営者からは、全国チェーンの一店舗であるにもかかわらず、地域密着の一商店としての特徴がなくなり、信頼度が相対的に低い、という話を何度も耳にした。

(4) あるいは多くの場合、家族経営のコンビニ経営者は、コンビニに転換する前に営んできた「一商店」を継続しながら、さらにコンビニ経営にも取り組んで来た。そのため、コンビニ経営を辞めて以前の一商店に戻っても、「一商店」店主としての自信を容易に取り戻す事が出来た。

(5) フランチャイズ経営をしている期間に、オーナー個人やその家族は多くの場面に遭遇した。元オーナーは、地域や社会の違った面を見る事が出来た、と語る。

(6) フランチャイズ店を経営した経験は、時代の変化の中で個人事業と地域社会のあり方を考える「ライフコース」ストーリーとなるであろう。

#### 課題

今後、Cタイプ（商店経営の経験がないコンビニ）の経営者にも注目し、Aタイプ（既に商店を家族経営していたコンビニ）の経営者

と比較してどのような場面に遭遇して来ているのか、研究調査を続けてゆきたい。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

- ① Gavin H. Whitelaw, “Lights in the Fields: Convenience Stores and Metropolitan Japan,” *The Frontier* (ICU Japan Studies Program) Vol.4, 2011, pp. 57-69. 査読無

〔学会発表〕（計11件）

- ① Gavin H. Whitelaw, “Texas Tutoring Tokyo: What Light Might America’s Retail Experience Shed on Convenience Culture in Japan,” 同志社大学アメリカ研究所 部門研究研究会, February 24, 2011, Doshisha University, Kyoto.
- ② Gavin H. Whitelaw, “At Your Konbini: An Anthropological Exploration of Japan’s Premier Counter Culture,” Kyoto Center for Japan Studies (KSCJ) Special Lecture February 23, 2011, Doshisha University, Kyoto
- ③ Gavin H. Whitelaw, “My Konbini: At Crossroads of Science, Technology and Culture in Today’s Japan,” AY2010 MEXT Grant-supported Super Science High School Guest Lecture, February 17, 2011, Tokyo Tech High School of Science and Technology, Tokyo
- ④ Gavin H. Whitelaw, “Konbinity? Convenience Stores and the Question of Livelihood in Contemporary Japan,” Waseda University Graduate School of Asian and Pacific Studies, January 19, 2011, Waseda University, Tokyo
- ⑤ Gavin H. Whitelaw, “Really? Convenience Stores Scholarship: Understanding Japan’s Convenience Culture through the (Originally) American Convenience Store” (えっ?コンビニが学問:コンビニ発祥の地アメリカから見た日本の便利文化), Tama Area University Academic Consortium (TAC) Annual Meeting, November 30, 2010, International Christian University, Tokyo
- ⑥ Gavin H. Whitelaw, “Lights in the Fields: Convenience Stores and Metropolitan Japan,” *Fanning the flames: William Kelly’s Contributions to the Spread of Japan Anthropology*, American Anthropology Association

Annual Meeting, November 21, 2010, New Orleans, LA, USA

- ⑦ Gavin H. Whitelaw, “Maintaining Convenience: Franchising the Family in Japan Today,” Families and Work: Transformations and Continuities in Contemporary Society, British Association of Japan Studies, September 10, 2010, School of Oriental and African Studies, University of London
- ⑧ Gavin H. Whitelaw, “Travails of Trash: Convenience Stores and the Poetics of Paracapitalism in Contemporary Japan,” Markets, Moneys, and Mobilities: Transnational Organizing Panel, European Association of Social Anthropology Annual Meeting, August 25, 2010, University of Ireland, Maynooth
- ⑨ Gavin H. Whitelaw, “Fieldwork Among Franchises” Japan Anthropology Workshop (JAWS) 2010 Panel: Trajectories and Cohorts in Japan Anthropology, March 15 2010, University of Texas, Austin
- ⑩ Gavin H. Whitelaw, “Shoptalk: Lives and Livelihood from the Epicenter of Convenience Culture,” 東京大学社会科学研究所 現代日本研究会, January 28, 2010, University of Tokyo
- ⑪ Gavin H. Whitelaw, “Konbini Culture: Observant Participation and the Localization of American Commerce in Contemporary Japan,” October 20, 2009, Doshisha University, Kyoto

[図書] (計2件)

- ① Christina Garsten, (ed.), Gavin H. Whitelaw, “Counter Intelligence: The Contingencies of Clerkship at the Epicenter of Convenience Culture,” Berg Press, 2011 (刊行決定)
- ② Carolyn Stevens (ed.) Gavin H. Whitelaw, “To Touch or Not to Touch: Feeling One’s Way through the Social Poetics of Convenience Store Work,” Routledge Press, 2011 (刊行決定)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

ホワイトロウ ギャヴィン

(WHITELAW GAVIN)

国際基督教大学・教養学部・准教授

研究者番号：50527140

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし